

## 佐伯胖先生のこと

高木光太郎

青山学院大学社会情報学部

青山キャンパスの8号館というのはキャンパスの少し奥まったところにある古い建物で、その3階は昔の旅館のように暗い少し傾斜のある廊下をはさんで隣の講義棟と繋がっている。ちょうどその継ぎ目のあたり、厳密にいうと8号館なのか隣の建物なのか分からない部分に大学院社会情報学研究科の院生室があり、その壁際の一角を半透明ガラスのパーティションで区切ったスペースが、佐伯胖先生のオフィスになっている。研究・指導ブースと呼ばばかっもいいが、どちらかという「秘密基地」といった風情である。ただ実際には全然「秘密」ではなく、パーティションの上のほうが、空調の関係で30センチほど開いているので、ここで仕事をしていると、パソコンのキーボードを叩いても、咳をしても、ぜんぶが院生室全体に響き渡る。こうして院生達は、そして隣のブースにいる私も、常に佐伯先生の気配を感じながら勉強や仕事をするという特権を得ることができる。幸甚としか言いようがない。これに加えて早朝に院生室に行けば、先生が吹くフルートの「朝練」の音をBGMにしながらスターバックスのコーヒーを飲み、一日をスタートすることさえも可能である。これもまた幸甚としか言いようがない。

さて、こんな具合なので、青山キャンパスの院生室で仕事をしていると、隣から佐伯先生が院生を叱咤したり、絶賛したりする声がよく聞こえてくる。社会情報学研究科の院生で青山キャンパスに就学している人たちは本当に多様で、学部からすぐに博士前期課程に進学してきた若い院生、企業、NPO、病院など様々な組織で活躍している社会人院生、そしてすでに大学で教鞭をとっている博士後期課程の院生、と年齢も背景もバラバラである。そうした色々な人たちが佐伯先生の「秘密基地」で「何が言いたいかまったく分からない」「問いが無いんだよ」と叱られてしどろもどろになり、「面白い!」「これはあなた、なかなか凄い話ですよ!」と褒められて高揚している。

隣で私は「変わらないなあ」「同じだよなあ」といつも思う。私は1988年に東大の教育学研究科修士課程に進学して博士課程が終わるまで先生のご指導を受けたが、その頃と寸分違わない叱咤であり、絶賛なのである。佐伯先生は、とにかくその研究が、学問をよりよい方向に動かし変えるポテンシャルを持っているかどうかという一点しか見ない。そういう可能性のある研究を「面白い」と絶賛し、そうでなければ「つまらない」と酷評する。先生は、研究の「面白さ」を見極める稀代の目利きであり、この基準のもと学部生でも世界的に著名な研究者でも全く平等に接する姿勢を貫かれている。掛け値なく平等なので学生にはつらいことも多いのだが、褒めていただいたときは、自分の研究にも学問を動かす可能性があると感じ、信じることができる。だから学生は、そしてプロの研究者たちも、先生の「面白い!」という一言をなんとか引きだそうと必死に取り組むのである。こういうコミュニケーションが、おそらくは1988年よりもずっと前から、今日まで変わらない密度で持続していることはまったく驚嘆すべきことで、その緊張感の渦中に学生として、また研究者、教員として長い時間いることができたのは本当に貴重なことだった。幸甚としか言いようがない。

佐伯先生、ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。